

鷗外は舞姫を何のために書いたのか

はじめに、僕がこのテーマについて書こうと思った理由は、鷗外は舞姫で何を伝えたかったのだろうかと思ったからである。そんな時、舞姫が鷗外の体験をもとに書かれているということを知って、鷗外自身が体験したことをこの舞姫で伝えたかったのではないかと考えた。そして、舞姫で伝えたかったことは、自分の意志で決断しないととても後悔するという事。つまり、時代の流れに流されず自分の意志をもつことが大事であるということである。

僕が、このように思った理由をこれから述べようと思う。まず、豊太郎の生き方は、舞姫が書かれた明治時代では当たり前の滅私奉公、さらには立身出世の生き方であった。そのため、幼いころから厳しい教育を受け、今の東京大学ではいつも首席でいた。265ページの「我が名を成さんも・・・悲しとは思わず」とあるように、ドイツ留学も立身出世のためであると思い、そのための犠牲は仕方ないと思っている。しかし、この時代はこの考えが当たり前であるから、豊太郎自身は自分の意志や自我が今の生き方にないということをつまづかずに立身出世の道だけを突き進んでいる。これは、269ページの「余が幼きころより・・・ただ一筋にたどりしのみ。」とあることから分かる。

しかし、この生き方が間違いだと気付киだしたのが、ドイツ留学してから三年後である。267ページの「余は父の遺言を守り・・・攻むるに似たり」とあるように自分の生き方に自我を見出そうとしている。だから、268ページの「また大学にて・・・境に入りぬ」とあるのである。ここでの法科は今まで通り立身出世のための勉強であるが、歴史や文学は豊太郎の興味のあることで、自分の個性のための勉強である。つまり、公のためでなく、自分のための勉強をするようになったのである。

そして、ドイツに来て起きた大きな出来事がエリスとの出会いである。272ページの「我が臆病なる心は・・・大胆なるにあきれたり」とあるように今までの豊太郎では考えられない行動をしている。これは、ドイツに来てから豊太郎が変わり始めているという表れだと思う。そして、僕はエリスとの関係は豊太郎の自我が現れている証拠だと思う。なぜなら、豊太郎は今まで、家や国のために生きてきたが、エリスとの関係は自分自身のことについてことだからである。

そして、この小説は豊太郎にドイツに来る前の生き方かドイツに来てからの生き方のどちらかをこれからしていくのかという選択をさせている。自我を捨てるか自我を大事にするかという選択である。つまり、日本に帰りエリートコースに戻るかエリスとの関係を続けるかということである。

しかし、豊太郎はどちらかを選ぶということができなかった。そして、友人である相沢によってエリスとの関係を続ける道がなくなり、日本に帰るという前の生き方に戻ってしまう。このことは、292ページの「自ら我が・・・誇りしにはあらずや」とあることか

らも分かる。

このように自分の意志で決断できなかったことを、豊太郎が後悔しているのが分かるのが、263ページの「人知らぬ恨みに・・・我が心を苦しむ」である。この文から、今回の出来事がとても深く心に残っていることが分かる。

以上のことから、鷗外は舞姫で意志の重要性を伝えていると、僕は考える。

○参考にしたもの 国語便覧（数研出版）